

TSV (バイヤー社体操-スポーツクラブ) の 子どもスポーツ部門に関する調査研究

A Study on the Children's Sports Department
of the TSV Bayer 04 Leverkusen

鈴木智子* 嶋崎博嗣** 松尾順一*
SUZUKI Tomoko SHIMAZAKI Hirotsugu MATSUO Junichi

要旨

本研究の目的は、TSV (バイヤー社体操-スポーツクラブ) の子どもスポーツ部門について、指導の方針や構造及び内容を明らかにすることである。2011年9月11日~15日及び2012年8月28日~8月31日の間、ドイツ、レバークーゼン市にある当該施設に赴き、専任教諭へのインタビュー、資料の収集、講座の見学を行った。その結果、指導構造が明らかになった。すなわち、①0~3歳児までには「親子体操」と呼ばれる講座が提供されており、②4~7歳児は1学年ごと、8~9歳児は2学年合同のクラスで、「基礎スポーツ」と呼ばれる陸上、ボール運動、器械体操を中心とした講座が提供されていること、③4歳児学年の終わりに『スポーツテスト』が実施され、上位1割は才能促進の目的で、下位1割はスポーツを楽しませる目的でクラス分けされ、その後の3学年は同じクラスで講座を受講すること、④4~7歳児の4学年では、毎年『子ども体操ワッペンテスト』が実施されること、⑤8~9歳学年以降に、特定のスポーツ講座に所属するようになることなどである。また『子ども体操ワッペンテスト』の内容と評価基準より各学年の指導内容や到達目標も明らかになった。加え、各講座は多様な方法で展開されており、“学び”ではなく“遊び”として取り組む子どもたちの姿が観察された。

キーワード：バイヤー社 総合型地域スポーツクラブ 子どもスポーツ 運動指導

*東洋大学ライフデザイン学部健康スポーツ学科 Toyo University, Faculty of Human Life Design

**東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科 Toyo University, Faculty of Human Life Design

住所：〒351-8510 朝霞市岡48-1 (東洋大学)

1. 目的

最初に、本研究におけるスポーツクラブとは、多種目、多世代、多目的を旨とする総合型地域スポーツクラブのことである。TSV（バイヤー社体操 - スポーツクラブ）は、バイヤー社が1904年に従業員のためのスポーツ支援として始めて以来100年以上の歴史を持つスポーツクラブ（40%がバイヤー社の社員¹⁾）である。バイヤー社は、ドイツ・ケルン市に隣接するレバークーゼン市に本社を置く国際的な総合化学企業であり、日本では市販解熱剤「アスピリン」の製造会社として古くから著名である。TSV（バイヤー社体操 - スポーツクラブ）は、バイヤー社本社の所在地レバークーゼン市にあり、現在は、あらゆる年齢層を対象とした健康スポーツ、障がい者スポーツ、競技スポーツに関わるプログラムを持ち、専門競技もバスケットボール、チアリーディング、ハンドボール、トライアスロン、ファウストバル、サッカー、インラインスケート、陸上競技、体操、ボクシング、フェンシング、柔道、水泳、バレーボールなど幅広く、サッカー・ブンデスリーガのバイヤー・レバークーゼンが特に有名だが、競技スポーツにおいて数々の五輪メダルを獲得するなどトップ選手を輩出するクラブでもある。すなわち、一般市民スポーツとトップ競技者スポーツが見事に共存する総合型地域スポーツクラブといえる。総会員数は9700名で女性会員が男性会員より少し多く、18歳までの若い会員が50%を占めている（アンネ・ヴィンクヒェン事務局長へのインタビュー [2011年] より）。ドイツの一般的なスポーツクラブの現状をみると、大多数（69.2%²⁾、64.3%³⁾）が会員数300名以下で単一種目を提供する小規模クラブであることから、TSV（バイヤー社体操 - スポーツクラブ）は、ドイツ国内においても珍しい多種目、多目的の大規模スポーツクラブであることがわかる。また、子どもスポーツ部門には1歳未満～9歳児学年までの入会者だけで約2000名、1学年約200名が在籍し、4歳児（日本の年中児）～7歳児学年（日本の小学2年生）は、学年ごとのクラス編成で陸上、ボール運動、器械体操を中心とした基礎スポーツと呼ばれる一講座多種目型の講座が展開されており特徴的である。

一方、日本でも、ドイツなどの総合型地域スポーツクラブをモデルとしながら、1995年より総合型地域スポーツクラブの育成モデル事業が文部省（現：文部科学省）により行われてきた。その後、地方自治体も独自に育成モデル事業を始め、1998年には神戸市、2000年には兵庫県が、他にも青森県、福島県、岐阜県、静岡県、香川県、山口県、佐賀県、熊本県などがモデル事業を行ってきた。日本の総合型地域スポーツクラブにおいて子どもが参加できる講座をみると、その大部分が一講座一種目で、また、幼児～小学校低学年に限定された講座はほとんどない。例えば、兵庫県神戸市の総合型地域スポーツクラブを例にあげてみよう。兵庫県は、「子どもを地域で、スポーツによって、そして地域スポーツクラブにおいて育てる」という理念に基づき、108億円の巨費を投じ総合型地域スポーツクラブの育成補助事業を行っており、日本の都道府県中最多の832の総合型地域スポーツクラブを有する⁴⁾。神戸市にはほぼ全小学校区に1つのクラブがあり、その数は164（平均会員数255.9名⁵⁾）である。神戸市の164のクラブにおいて、子どもが参加できる講座数は756で、クラブ1つあたり0～11講座（平均4.6講座）である。この756講座のうち幼児及び小学校低学年（1・2年生）が参加できると明記されている講座は70（9.3%）、幼児～小学校低学年（1～3年生）に限定された講座は4（サッカーが3、野球が1）（0.52%）である。また、子どもが参加できる756講座のうち、一講座多種目型

（多くは複数の球技）の講座は19（25%）である⁶⁾。日本では、子どもを育てることを理念とし、多くのスポーツクラブを有する都市であっても、幼児～小学校低学年に限定されたスポーツ講座は極めて少ないことがわかる。また、幼児～小学生はゴールデンエイジともいわれ、できるだけいろいろな運動を経験することがよいとされているが、一講座多種目型の講座も非常に少ない。

以上のことから、4歳児～7歳児学年を学年ごとにクラス編成し一講座多種目型の運動指導を実践し、成人しても健康スポーツや競技スポーツとして運動を継続するスポーツパーソンへと育てているTSV（バイヤー社体操－スポーツクラブ）の指導構造やカリキュラムを調査することは、日本の総合型地域スポーツクラブにとって援用可能な価値ある調査研究となると考えられる。また、これまでもTSV（バイヤー社体操－スポーツクラブ）に関する調査研究⁷⁾やドイツのスポーツクラブに関する調査研究^{8) 9)}はされてきているものの、その指導構造や内容にまで踏み込んだものはない。よって、本研究では、TSV（バイヤー社体操－スポーツクラブ）の子どもスポーツ部門の指導構造や4歳児～7歳児学年の指導計画及び到達目標を明らかにし、生涯にわたって運動を継続させるための子どもの運動指導プランについて何らかの示唆を得ることを目的とする。

2. 研究方法

(1) 調査対象

調査対象は、TSV（バイヤー社体操－スポーツクラブ）の子どもスポーツ部門である。以下TSVとする。クラブの正式名称はTSV Bayer 04 Leverkusen、TSVはTurn-und Sportverein（体操－スポーツクラブ）を意味する。

(2) 調査内容

調査内容は以下の通りである。

- (1) 子どもスポーツ部門の方針と構造
- (2) 指導計画及び到達目標
- (3) 指導場面の実際

(3) 調査方法

2011年9月11日～15日及び2012年8月28日～8月31日の間、当該施設に赴き、専任教諭へのインタビュー、資料の収集、講座の見学を行った。以下は、インタビュー調査の対象、提供された資料、見学した講座の一覧である。

表1 インタビュー調査の対象と内容

インタビュー調査の対象	内容	調査年月日
アンケ・シュトラセヴスキ専任教諭	子どもスポーツ部門の方針及び指導構造	2011年9月12日
アンヤ・シュバルツ専任教諭	子どもスポーツ部門の指導計画及び指導者	2012年8月30日

表2 TSVから提供された資料一覧

TSVから提供された資料	収集年
スポーツテストの内容	2011年訪問時
スポーツテストの評価基準	2012年訪問時
子ども体操ワッペンテストの内容	2011年訪問時
子ども体操ワッペンテストの評価票	2012年訪問時

表3 見学した講座一覧

見学した講座	担当教諭	見学年月日
親子体操	イリス・デューエ専任教諭	2011年9月12日
創造的グループ (2006年生まれ: 5歳児)	イリス・デューエ専任教諭	2011年9月13日
促進グループ (2005年生まれ: 6歳児)	イリス・デューエ専任教諭	2011年9月13日
少女のためのダンス (8~9歳学年)	アンヤ・シュバルツ専任教諭	2011年9月14日
親子体操	イリス・デューエ専任教諭	2012年8月28日
創造的グループ (2007年生まれ: 5歳児)	イリス・デューエ専任教諭	2012年8月28日
促進グループ (2007年生まれ: 5歳児)	ジルケ・タイセン専任教諭	2012年8月28日
基礎スポーツ (2007年生まれ: 5歳児)	専任教諭怪我のため代任教諭2名	2012年8月29日
基礎スポーツ (2008年生まれ: 4歳児)	フォルカー・シュレーダー専任教諭	2012年8月30日

3. 結果及び考察

(1) 方針及び指導構造

i. 方針

子どもスポーツ部門は「競技スポーツ」と「余暇スポーツ」の両面を重視している。すなわち、子どもスポーツ部門では、競技スポーツを志す者にとっても、余暇の楽しみとしてスポーツする者にとっても、一生涯スポーツへのモチベーションが続くように、幼い時期からその両面を想定している。スポーツに動機づけられた子どもは、測定したり、比較したり、改善しようとし、運動の欲求や運動の喜びにブレーキがかかることはないが、スポーツに積極的になれない子どもは、運動学習を難しく感じ、比較されることや、パフォーマンスを要求されることはマイナスに作用し、スポーツと消極的な連想がすぐに結びついてしまう。そこで、TSVでは4歳児学年の終わりに『スポーツテスト』を実施し、才能を促進すべきグループとスポーツに消極的なグループを抽出し、スポーツへのモチベーションが生涯続くように、それぞれに相応しいやり方で運動を指導している。また、4歳から専門的なスポーツを始めるのは早すぎるとの考えから、4~7歳児の4学年では「基礎スポーツ」と呼ばれる陸上、ボール運動、器械体操を中心とした講座を提供している。すなわち、多様なスポーツを体験させることにより自己の特性理解を促し、6歳児学年より段階的にスポーツ選択が可能になる構造としている。すなわち、スポーツの嗜好性や専門性が徐々に深化することをねらっている。そして、10歳以降より、「競技スポーツ」として、また「余暇スポーツ、健康スポーツ」として、特定の

スポーツ講座に属するようになる。

ii. 指導構造

1歳未満～9歳児学年までの子どもスポーツ部門入会者は約2000名、1学年200名が在籍している。また、4～7歳児は1学年ごと、8～9歳児は2学年合同で、クラス編成がなされ、1クラス約20名で指導が展開される。なお、TSVの年度は9月から始まるが、学年は生まれ年ごとである。すなわち、2011年9月から開始する4歳児学年は、2007年1月～12月生まれの子どもである。日本の場合、2012年4月から開始する年中児（4歳児）学年は、2007年4月2日～2008年4月1日生まれまでであるので、学年が始まる前日までに全員4歳になるが、TSVの4歳児学年は学年が開始して4ヶ月で全員4歳になる。すなわち、TSVの学年は日本の学年より、4ヶ月早く始まる形になる。ちなみに、ドイツの小学校にあたる基礎学校（Grundschule）は、日本と同様に6歳になってから入学する形であるため、学校とTSVでは、学年の年齢構成が異なる。図1は、TSV子どもスポーツ部門のホームページに掲載されている指導構造¹⁰⁾である。以下、年齢別に概要をまとめる。

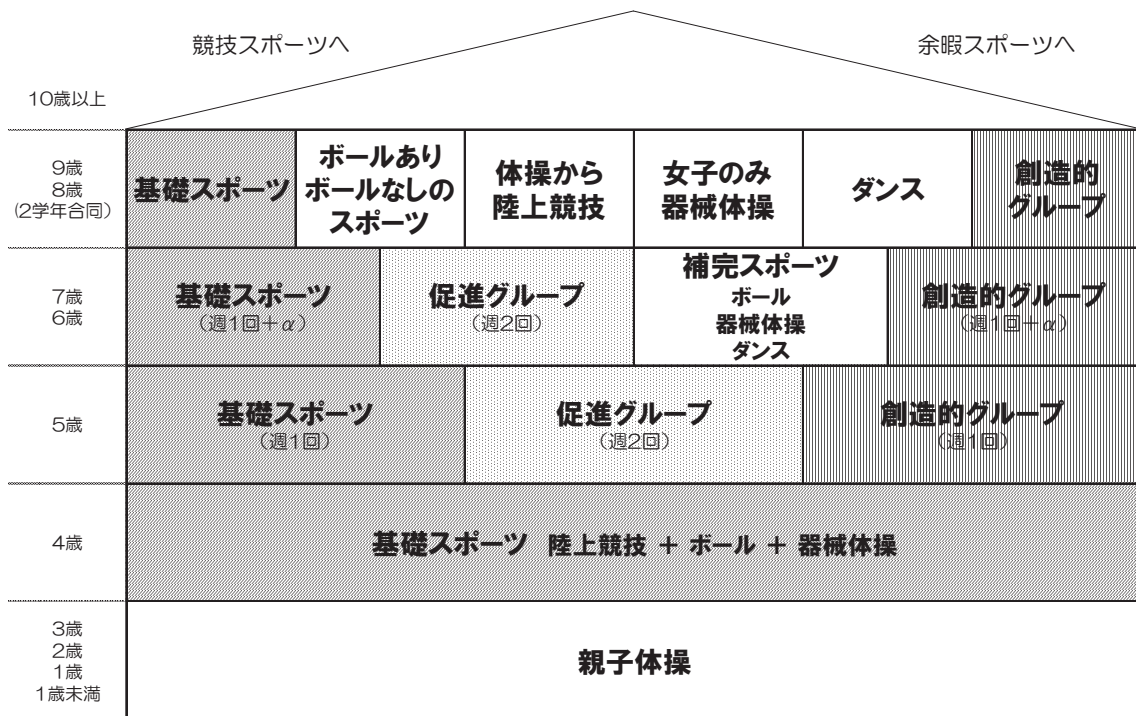


図1 TSV子どもスポーツ部門の指導構造

1歳未満～3歳

子どもの身体強化と動きの体験を目的として、親子で指導が展開される。1講座は1時間で、月～木曜日の午前中（8時30分～12時30分）に毎日4講座ずつ、午後にも1～2講座が開講されている。午前中の講座は、申込みの必要はなく、自由に参加したいときに参加できる。2011年から、0歳児（6ヶ月～）の親子体操も加わった。通常のスポーツクラブの場合、4歳からの受け入れであるため、本講座はデュッセルドルフなどかなり遠方からの参加もある。このように午前中に講座を開講できる

のは、学校等の施設を借りるのではなくクラブ所有の施設があるためである。

4歳児学年

4歳児学年以降も原則1講座1時間である。この学年では、「基礎スポーツ」と呼ばれる陸上、ボール運動、器械体操を中心とした講座のみが開講されており、子どもたちは週に1講座、20名ほどの決められたクラスで受講する。また、到達度把握のため、4～7歳児学年において毎年1～3月に1度、『子ども体操ワッペンテスト1～4級』が実施され、到達度によって、金・銀・銅の賞が与えられる。4歳児学年では、『子ども体操ワッペンテスト1級』が実施される。また、それとは別に4歳児学年の終わり（5～6月）に、『スポーツテスト』が実施される。『スポーツテスト』の結果により、上位20名（約10%）が「促進グループ」、下位20名（約10%）が「創造的グループ」、それ以外の160名は「基礎スポーツ」というように能力別コースに進むことを提案される。なお、このコース分けは、あくまで提案であり、最終的には保護者の意思に委ねられる。しかし、現在のところ、クラブ側の提案に対する拒否などの問題は起こっていないという。

5歳児学年

この学年から、「基礎スポーツ」（約8クラス）、「促進グループ」（1クラス）、「創造的グループ」（1クラス）の3コースに分かれた指導となり、5～7歳児学年の3年間は同じクラスで受講する。難易度や指導方法は異なるが、内容はどのコースも陸上、ボール運動、器械体操を含む基礎スポーツである。「促進グループ」ではタレント発掘を目的とした指導がなされる一方、「創造的グループ」ではパフォーマンスは要求せず、空想をともなった身体活動（例えば、工事現場ごっこ）による運動の楽しさに力点が置かれた指導となっている。「基礎スポーツ」、「創造的グループ」は週1回1時間、「促進グループ」には週2回各1時間の講座が提供される。なお、『子ども体操ワッペンテスト2級』が1～3月に1度実施される。

6歳児学年、7歳児学年

「促進グループ」には、ひきつづき週2回各1時間の講座が提供され、スポーツタレントの伸張が図られる。一方、6～7歳になると、特化したスポーツへの興味が深まることから「補完スポーツ」が増設される。「補完スポーツ」としてボール運動、器械体操、ダンス（女子のみ）の3つのコースが用意されている。3つのコースには専門の指導者が配置される。「基礎スポーツ」、「創造的グループ」は週1回1時間の講座に加え、これら「補完スポーツ」の中からもう1講座受講するようクラブ側から提案される。すなわち、6歳児学年からは週2回受講することを勧めている。週2回受講するかどうかの最終的な判断は保護者に任されている。なお、それを受け入れた場合、「基礎スポーツ」に籍を置く子どもは、「基礎スポーツ」に加え「補完スポーツ（3つうちのいずれか）」を受講することとなり、専門性の分化が図られる構造となっている。一方、「創造的グループ」に籍を置く子どもは、「創造的グループ」に加え「基礎スポーツ」または「補完スポーツ（3つのうちいずれか）」を受講するという選択になり、活動機会の拡大が図られる構造となっている。クラブ側は、競技スポーツの推進と同じ比重で余暇スポーツを奨励しており、特に、「創造的グループ」に籍を置く子どもの週2回の活動選択に期待を寄せている。

また、8・9歳児学年では、「補完スポーツ」が分化した4コース「ボールありのまたはボールなしのスポーツ」、「体操から陸上競技へ」、「女子のみの器械体操」、「ダンス」が新設されるため、7歳

児学年の夏休み前に8・9歳児学年のプログラムの「お試し体験」ができる。新設のコースでは、スポーツの専門性がより顕著になるため、子どもが自身の嗜好性を確認したり、コースの雰囲気を感じ取る事前準備の機会となっている。「お試し体験」を経て、8・9歳児学年以降のコース選択が実施される。なお、『子ども体操ワッペンテスト3級及び4級』が各学年の1～3月に1度実施される。

8・9歳児学年

8・9歳児学年は、各コース2学年合同で実施される。また、自分の好きなコース・回数を選択できる仕組みとなっている。この学年以降には『子ども体操ワッペンテスト』は存在しない。

8・9歳児学年以降、それぞれの趣向に合わせたコース選択が可能となり、専門スポーツ講座に所属する子どもも多くなる。しかし、問題点もあるという。各競技の専門指導者は、競技者養成のための指導に傾斜し、子どもの特性に配慮できないケースが少なくない。そうしたことから、一旦専門スポーツ講座に参加した子どもが、指導内容に不満を持ち、「基礎スポーツ」に戻ってくるケースもあるという。

(2) 指導計画及び到達目標

前述した方針や指導構造より、4～7歳児学年では基礎スポーツ（陸上、ボール運動、器械体操を中心とする）を重視していることがわかる。4～7歳児学年の運動プランこそが、生涯にわたって運動を継続するスポーツパーソンの礎になるとの考えなのであろう。そこで、この学年の指導計画について、子どもスポーツ部門の専任教諭2名にインタビューを行ったが、具体的な指導計画はなく、指導内容及び指導計画は個々の教諭に任されているとのことであった。よって、この学年の指導計画と到達目標をある程度反映していると考えられる『スポーツテスト』と『子ども体操ワッペンテスト』の内容及び評価基準を分析し、指導計画と到達目標について考察したい。表4は、学年ごとに実施されるテストの一覧である。

表4 4歳児～7歳児学年で実施されるテスト一覧

学年	実施されるテスト
4歳児学年（※9月～）	『子ども体操ワッペンテスト1級』（1～3月）、『スポーツテスト』（5月）
5歳児学年（※9月～）	『子ども体操ワッペンテスト2級』（1～3月）
6歳児学年（※9月～）	『子ども体操ワッペンテスト3級』（1～3月）
7歳児学年（※9月～）	『子ども体操ワッペンテスト4級』（1～3月）

※ 年度によって、新学期の開始日は多少変動する。8月に開始する場合もある。

i. スポーツテスト

4歳児学年の終わり（5～6月）に、コース分けの目的で実施されるテストが『スポーツテスト』である。『スポーツテスト』の結果により、上位20名（約10%）が「促進グループ」、下位20名（約10%）が「創造的グループ」、それ以外の160名は「基礎スポーツ」というように能力別コースに進むことを提案される。なお前述したように、TSVの学年は、生まれ年ごとである。すなわち、2011年9月から開始する4歳児学年は、2007年1月～12月生まれの子どもである。日本の場合、2012年4月

から開始する年中児（4歳児）学年は、2007年4月2日～2008年4月1日生まれまでであるので、年度が始まる前日までに全員4歳になるが、TSVの4歳児学年は年度が開始して4ヶ月で全員4歳になる。すなわち、TSVの4歳児学年は日本の年中児（4歳児）学年より、4ヶ月早く始まる形になる。図2は、日本の4歳児学年とTSVの4歳児学年の年齢構成の違いを示したものである。年齢構成という観点でみると、TSVの4歳児学年の5～6月に実施される『スポーツテスト』は、学年の約3分の1の子どもが5歳になった時期にあたり、日本の4歳児学年（年中児）の8～9月に実施しているのと同様といえる。

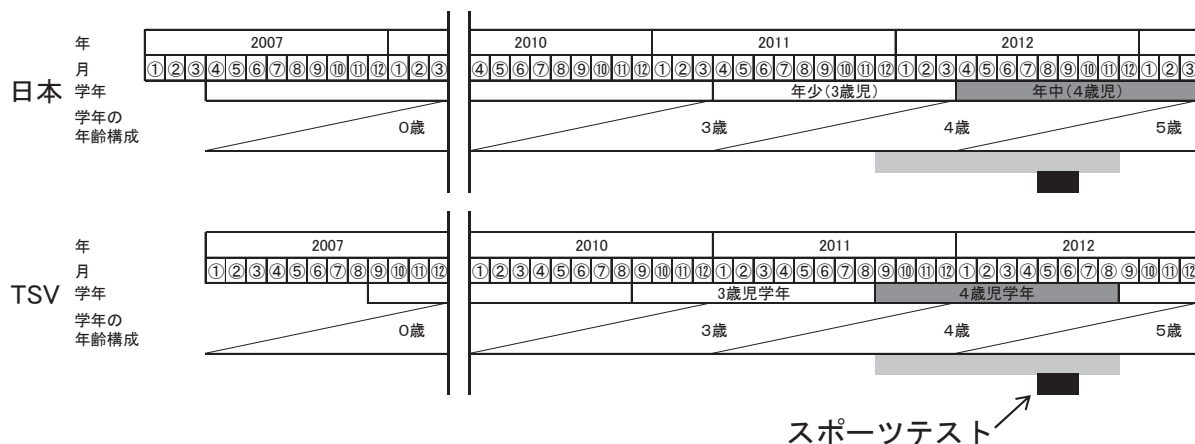


図2 日本とTSVにおける4歳児学年の年齢構成

表5と表6は、TSVから提供された『スポーツテスト』の内容及び評価基準についての資料を翻訳したものである。『スポーツテスト』の評価についてはタイムや距離など数値で判断するものが多いが、いかにスムーズできるかという観察的評価も含まれる。このテストの評価は、アンケ・シュトラセヴスキ専任教諭が1週間で全クラスをまわりすべて一人で行うため、観察評価の基準についても一定といえる。

『スポーツテスト』は、「1. フープ越え走」、「2. 障害走」、「3. 連続立幅跳び」、「4. 立位体前屈」、「5. 開脚座での前屈」、「6. 支持力」の6種目と、『子ども体操ワッペンテスト1級』の計7種目の点数で評価される。7種目の最高点はすべて1である。数字が小さいほど成績が良いことを示し、『子ども体操ワッペンテスト1級』以外の6種目の最低点は4である。『子ども体操ワッペンテスト』の成績は、最高点の金が1、次いで銀が2、銅が3という点数である。次にそれぞれの種目の内容について述べる。「1. フープ越え走」は、床に置かれた17個のフープすべてに片足を踏み込みながら走るという内容で、フープに足を踏み入れなかった回数をミスとしてカウントする評価方法となっている。よって、この種目では走力より巧緻性が測定されていると考えられる。「2. 障害走」は、ハードルの跳び越し、ジグザグ走、ハードルのくぐり抜けを含み、主にタイムで評価される。この種目では、動的筋力（走力）と巧緻性が測定されていると考えられる。「3. 連続立幅跳び」は、5回連続で立幅跳びをした際の到達距離が評価される。この種目では動的筋力（跳躍力）が測定されていると考えられる。「4. 立位体前屈」は、かつて日本のスポーツテストで実施されていたものと同様で、前屈の深さを評価する。この種目では柔軟性が測定されている。「5. 開脚座での体前

表5 『スポーツテスト』の内容

1. フープ越え走 ● 用具：フープ17、必要であればストップウォッチ	
<課題設定>	フープを越えて走る。フープに一歩だけ踏み込んでよい。やり方は自由である。
<評価基準>	リズム感覚や運動テンポの観察(必要があればタイムを測ることもある) 観察的評価
2. 障害走 ● 用具：バー3本、コーン7つ、脚6つとバー固定具6つ、ストップウォッチとテープ(全長18メートル)	
<課題設定>	① 壁に両手を触れてのスタンディングスタート ② 2つの低いハードルを跳び越えて走る(25cmの高さ、助走3m、間隔2m) ③ コーン6つをジグザグ走で通り抜ける(助走3m、間隔1m、次の障害物まで3m) ④ ハードルの下をくぐり抜ける(高さ50cm、方向転換コーンまで2m) ⑤ 方向転換コーンを回りそしてそれと同じ距離を戻る ⑥ コースの最後のラインに手を触れる。
<評価基準>	所要時間と印象 タイムと観察的評価
3. 連続立幅跳び ● 用具：巻尺	
<課題設定>	膝を曲げた姿勢から、力強く腕を振り、立幅跳びを連続5回行う。
<評価基準>	スタートポジションから5回連続して跳んだポイントまでの距離 跳躍距離＋観察的評価
4. 立位体前屈 ● 用具：ベンチと棒	
<課題設定>	ベンチの上に脚を伸ばして立ち、棒を肩幅に握って前屈する。
<評価基準>	→ バーがベンチより上 (－)悪い → バーがベンチの高さ (0)平均 → バーがベンチより少し下 (＋)良い → バーがベンチより手の幅下 (++)非常に良い 観察的評価
5. 開脚座での体前屈 ● 用具：体操棒	
<課題設定>	脚を伸ばし90度開脚して座り、体操棒を高く保持して腕と胴体の角度を180度に固定し前屈する。
<評価基準>	→ 胴体が45度より少ない (－)悪い → 胴体が45度 (0)平均 → 胴体が45度より深い (＋)良い → 胴体が床につく (++)非常に良い 観察的評価
6. 支持力 ● 用具：小さな箱2つ	
<課題設定>	2つの小さな箱の間、すなわち左右の小さな箱の上に両手をつき体を支えたまま、脚の走運動を伴い10秒以上支持する。頭と身体をまっすぐにし、肩を固定して上体が揺れないように静止する。
<評価基準>	持続、腕の伸ばし 観察的評価
7. 子ども体操ワッペンテスト	
<課題設定>	体育の時間における行動の仕方、目立つかどうか、学習行動
<評価基準>	金 - 銀 - 銅

表6 『スポーツテスト』の評価基準

成績	1. フープ越え走		成績	2. 障害物走		成績	3. 連続立幅跳び		成績	6. 支持力	
	成績かタイム または 成績とタイム 17個のフープ								直接、成績を記入して下さい！		
1	ミスなし	4歳以下	1	18秒以下	1	650cm以上	1	10秒以上支持			
1.5		4.5歳以下	1.5	20秒以下	1.5	600cm以上	1.5				
2		5歳以下	2	22秒以下	2	550cm以上	2	約5秒支持			
2.5		5.5歳以下	2.5	24秒以下	2.5	500cm以上	2.5				
3	小さなミスあり		3	26秒以下	3	450cm以上	3	比較的静かに短時間の支持			
3.5			3.5	28秒以下	3.5	400cm以上	3.5	ぐらぐらするが短時間の支持			
4	非常に問題あり		4	30秒より遅い	4	350cm以上	4	自転車こぎ運動が全くできない			
ミス : フープに足を入れなかったこと。											
成績	7. 子ども体操ワッペンテスト		柔軟性								
			成績	4. 立位体前屈		成績	5. 開脚座での体前屈				
1	金		1	手がベンチよりかなり下		1	胴体は、ほぼ床に平らな状態(++)				
2	銀		2	手がベンチよりほんの少し下		2	胴体は、約45° 前に傾いた状態(+)				
3	銅		3	手=ベンチ		3	胴体はちょうど90° で、直立した状態(0)				
			4	手がベンチより上		4	胴体は90° までもいかず、脚が曲がったり、背中が丸くなる				

屈は、脚を90度開脚して座り、両手で体操棒を持ち高く上げ、体幹と上肢が一直線になるように保持したまま股関節を屈曲しながら体前屈を行う。この種目では、柔軟性と同時に、体幹や上肢を保持するための静的筋力も測定されていると考えられる。「6. 支持力」は、2つの跳び箱の間に立ち、左右の跳び箱の上に手をつき体を支えたまま、脚の走運動を行い10秒以上支持するという内容である。この種目では、体幹及び上肢の静的筋力を評価している。ただ支える力だけでなく、脚を動かしても耐えることのできる体幹の保持能力を測定している点で、より実践的な静的筋力を測定しているといえる。表7は、それぞれの種目で測定されていると考えられる運動能力をまとめたものである。巧緻性、動的筋力、柔軟性、静的筋力の4つの要素が均等な比重で測定されていることがわかり大変興味深い。このことが意図されてのことなのか、次の調査で明らかにしたい。

表7 『スポーツテスト』の各種目で測定されていると考えられる運動能力

種目名	測定されていると考えられる運動能力
1. フープ越え走	巧緻性
2. 障害走	巧緻性
	動的筋力 (走力)
3. 連続立幅跳び	動的筋力 (跳躍力)
4. 立位体前屈	柔軟性
5. 開脚座での体前屈	柔軟性
	静的筋力
6. 支持力	静的筋力
7. 子ども体操ワッペンテスト	総合的な運動能力

ii. 子ども体操ワッペンテスト

4～7歳児学年において毎年1～3月に1度、『子ども体操ワッペンテスト』が実施される。テスト種目は大きく、<体操>と<ボール>に分けられており、総合得点が優れている順に、金・銀・銅が与えられる。図3は、子どもたち1人1人に渡されるカードである。裏表に印刷されていて、4学年分のテスト内容と評価がわかるようになっている。4歳児学年のテストが1級、5歳児学年のテストが2級、6歳児学年のテストが3級、7歳児学年のテストが4級で、それぞれ金・銀・銅のシールを貼付する欄が設けられている。表8は、図3のカードに書かれている解説及びテスト内容を翻訳したものである。解説では、このテストの目的が述べられており、その解説によれば、子どもスポーツ部門の礎となるのが4～7歳児学年の運動指導プランで、『子ども体操ワッペンテスト』の目的は、運動指導プランの再検討や子どもたちに成功体験を与えることにあるという。また、図4～7はこのテストの評価票を翻訳したものである。評価票には、点数配分や評価基準についても明記されている。



図3 『子ども体操ワッペンテスト』の成績カード（裏・表）

表8 『子ども体操ワッペンテスト』の内容

解説	
<p>子どもスポーツ部門のプロフラムは、4歳～7歳(1～4級)の枠組みの運動プランを基礎にしている。子ども体操ワッペンテストは、これらの内容を再検討したり、また、子どもたちのスポーツにおける成功体験を助けるものである。それぞれの年齢段階において、決められたテストが実施され金・銀・銅が与えられ、結果はこのカードに記載される。それぞれの年齢段階に相応しい賞を得ることができる。</p>	
1級 (4歳児学年)	<p><体操> 床運動 壁倒立(お腹を壁に向け、足で壁を登る) - お馬ちゃん跳び3回 - 前転(補助あり)</p>
	<p>跳び箱 →4つの小跳び箱 跳び箱の上に膝をついて跳びのり / しゃがんで跳びのり 伸身ジャンプで跳び下りる</p>
	<p>バランス運動 →幅広のベンチ 前歩き - 後ろ歩き - お馬ちゃん跳び - 1/2ターン - 座る&立つ - 伸身ジャンプから着地</p>
	<p>ミニトランポリン →ベンチ2台+トランポリン+マット ベンチの上を助走 - 両足踏み切り - 伸身ジャンプから着地</p>
	<p><ボール> 的投げ →小跳び箱の上にフープを置く 1m離れたところからジムボール(両手で)とテニスボール(片手で)をそれぞれ3回フープに投げ入れる</p>
	<p>ボール調整力 →4つのボールかコーン 1) ジムボールを手で転がしてジグザグ走 →4つのフープ 2) フープの中でボールをバウンドさせてキャッチ →ゴールシュート 3) 3～5m離れたところから足でシュート</p>
	<p><体操> 床運動 斜めの踏切板上でしゃがんだ姿勢からの後転(補助あり) - 伸身ジャンプで半回転ターン - お馬ちゃん跳び - 1段の跳び箱で下向き横跳び越し - お馬ちゃん跳び - 倒立姿勢になるまで脚を振り上げる</p>
	<p>跳び箱 →2つの小跳び箱 - 踏切板+3段の跳び箱 - マット 小跳び箱にしゃがんで跳びのり伸身ジャンプ - 助走して大跳び箱にしゃがんで跳びのり伸身ジャンプ</p>
	<p>バランス運動 →幅の狭いベンチ 前歩き - 後ろ歩き - 1/2ターン - 膝を深く曲げる - 水平バランス - フィニッシュとして横開脚ジャンプ</p>
	<p>ミニトランポリン →2つのベンチ+トランポリン+マット ベンチの上を助走 - 抱え込みジャンプ / 横開脚ジャンプ</p>
<p>鉄棒 足抜きまわり(両足を持ち上げ両腕の間から後ろに回転し、お尻を持ち上げ再び両腕の間から前に回る。)</p>	
<p><ボール> 的投げ →3段跳び箱の上にフープを置く 2m離れたところからジムボール(両手で)とテニスボール(片手で)をそれぞれ3回フープに投げ入れる</p>	
<p>ボール調整力 →4つのボールかコーン 1) ホッケースティックとボール、サッカーボールでのジグザグ走 2) ボールを高く投げ上げ、拍手してキャッチする(3回行う)</p>	
3級 (6歳児学年)	<p><体操> 床運動 1段の跳び箱の上で・倒立姿勢になるまで脚を振り上げる - 1段の跳び箱の上で・側転して越える - 後転(子どもの補助あり) - 伸身ジャンプで半回転ターン - はさみ跳び</p>
	<p>跳び箱 →踏切板+3段の跳び箱 - マット 下向き横跳び越し / 台上前転(それぞれ1回ずつ見せなければいけない)</p>
	<p>バランス運動 →幅の狭いベンチ 前歩き - 後ろ歩き - 1/1ターン - お馬ちゃん跳び - 水平バランス - 手を横に広げる - 座る&立つ - フィニッシュとして側転</p>
	<p>ミニトランポリン →2つのベンチ+トランポリン+マット(6つの小跳び箱か3つのベンチの上に置かれている) 助走 - 抱え込みジャンプ / 障害物か棒を跳び越えて前転(それぞれ1回ずつ見せなければいけない)</p>
	<p>鉄棒 ジャンプして両腕支持 - 前回り - 肘を曲げゆっくりと脚を伸ばし - 下方に振り込んで鉄棒の前方に着地</p>
	<p><ボール> 的投げ →4段跳び箱の上にコーンを置く 3m離れたところからジムボールとテニスボール(頭上から片手で)を投げコーンに当てる(それぞれ3回行う)</p>
	<p>ボール調整力 →4つのボールかコーン 1) ジムボールでのジグザグドリブル 2) 壁に向かってワンバウンドパスし、壁に当たったボールをキャッチする(距離は任意、最高で2m)(3回行う)</p>
	<p><体操> 床運動 倒立前転(子どもの補助あり) - 助走からのとび前転(0.5mの高さの棒上) - はさみ跳び - 助走からの側転 - 大ジャンプ - 水平バランス</p>
	<p>跳び箱 →踏切板+3段の跳び箱 - マット 横向きの跳び箱・抱え込み閉脚跳び(子ども1、大人1の補助) / 縦向きの跳び箱・跳び箱にしゃがんで乗り側転で下りる(それぞれ1回ずつ見せなければいけない)</p>
	<p>バランス運動 →2つの小跳び箱の上に幅の狭いベンチ 前歩き - 後ろ歩き - 1/1ターン - お馬ちゃん跳び - 水平バランス - 手を横に広げる - 座る&立つ - フィニッシュとして側転</p>
<p>ミニトランポリン →2つのベンチ+トランポリン+マット(6つの小跳び箱か3つのベンチの上に置かれている) 助走 - 踏み切り - 宙返りまたは抱え込み跳びで1/2ターン - マットに着地または開脚座りで着地</p>	
<p>鉄棒 逆上がり - 後方支持回転(大人1、子ども1の補助あり) - 脚を後ろに振り - 下方に振り込んで鉄棒の前方に着地</p>	
<p><ボール> 的投げ →バスケットボールのカゴ、リング、ボード 好きなところから、ジムボール(両手で)かテニスボール(片手で上から)を投げ、カゴかリングかボードに当たったら1点、カゴに入ったら2点とし、それぞれのボールで3回、合計6回行う。</p>	
<p>ボール調整力 →4つのボールかコーン 1) 行きは、好きなボールでのジグザグドリブル - 帰りは後ろ歩き+ドリブルで戻る 2) ボールを高く投げ上げ、1回転ターンしてキャッチまたは、座ってキャッチ(3回行う)</p>	

子ども体操ワッペンテストの評価票	** 大変良い(2点)、* 良い(1点)、0ふつう(0点)
1級／4歳児学年	氏名 _____
<体操> 8点	
■床運動 **：壁倒立が完全に伸びた状態ででき、お馬ちゃん跳びの膝は高く、補助なしで前転ができる。 *：すべて補助なしでできるが完全ではない。 0：課題はできるが、補助が必要。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
■跳び箱 **：膝をそろえて跳び箱にしゃがんで跳びのることができ、伸身ジャンプでは身体に良い緊張があり、腕を振って跳ぶことができる。 *：完全ではないができる。 0：跳び箱に膝をついて跳びのることができる。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
■バランス運動 **：ぐらぐらすることなく安定したバランス運動ができ、身体に良い緊張がある。つま先でターンができ、座ったり立ったりも手の助けを借りることなくできる。伸身ジャンプは腕を振って跳ぶことができる。 *：完全ではないが、ベンチから落下することなくバランス運動ができる。 0：すべての課題に努力がみられたが、落下があった。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
■ミニトランポリン **：スムーズにできる。助走から片足で踏み切ってトランポリンへ、そしてトランポリンの上で両足踏み切りし、良い緊張のある伸身ジャンプから両足でしっかりと着地できる。 *：片足で踏み切ってトランポリンへ、そしてトランポリンの上で何度か両足ジャンプした後、両足で着地できる。 0：正しく行おうと努力している。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
<ボール> 2点	
■的投げ **：5～6回命中。 *：3～4回命中。 0：命中が2回以下。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
<ボール調整力> 6点	
■ジグザグ走 **：手からボールが離れることなくできる。 *：ボールをコントロールできる。 0：努力している。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
■フープの中でつく **：4個のフープすべてで、しっかりとボールをキャッチできる。 *：3個のフープで、ボールをキャッチできる。 0：2個以下のフープで、ボールをキャッチできる。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
■ゴールシュート **：助走からボールを蹴ってシュートできる。 *：立った状態から何回かできる。 0：ゴールしようと努力している。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
合計点	
<input style="width: 40px; height: 30px; border: 2px solid black;" type="text"/>	
合計点が、12～16点→金、8～11点→銀、すべての課題を見せられた→銅	

図4 『子ども体操ワッペンテスト』評価票 1級／4歳児学年

子ども体操ワッペンテストの評価票	**大変良い(2点)、* 良い(1点)、0ふつう(0点)
2級/5歳児学年	氏名 _____
<体操> 10点	
■床運動 ** : 補助なしで後転ができ、お馬ちゃん跳びの膝は高く、下向き横跳び越しでは両腕が伸ばされていて、倒立姿勢になるまで脚を高く振り上げられる。 * : 完全ではないができる。もしくは、後転が補助ありでできる。 0 : 努力しているが、すべての要素が補助ありである。	<input style="width: 40px; height: 20px;" type="text"/>
■跳び箱 ** : スムーズにできる。両足で踏み切り、両手の間に膝を持つことができ、伸身ジャンプでは身体に良い緊張がある。 * : 完全ではないができる。 0 : 跳び箱に膝をついて跳びのることができる。	<input style="width: 40px; height: 20px;" type="text"/>
■バランス運動 ** : ぐらぐらすることなく安定したバランス運動ができ、身体に良い緊張がある。つま先でターンができ、横開脚ジャンプでは両足が伸ばされている。 * : 完全ではないが、ベンチから落下することなくバランス運動ができる。 0 : すべての課題に努力がみられたが、落下があった。	<input style="width: 40px; height: 20px;" type="text"/>
■ミニトランポリン ** : スムーズにできる。助走から片足で踏み切ってトランポリンへ、そしてトランポリンの上で両足踏み切りし、かかえ込みジャンプでは膝がそろえられており、また横開脚ジャンプでは両脚が伸ばされていてしっかりと着地できる。 * : 片足で踏み切ってトランポリンへ、そしてトランポリンの上で何度か両足ジャンプしてしまうが、その他は正しくできる。 0 : 正しく行おうと努力している。	<input style="width: 40px; height: 20px;" type="text"/>
■鉄棒 ** : 鉄棒に足が触れることなくスムーズに回転でき、鉄棒の真下にしっかりと着地できる。 * : 鉄棒に足が触れてしまうがスムーズに回転でき、しっかりと着地できる。 0 : 努力している。	<input style="width: 40px; height: 20px;" type="text"/>
<ボール> 2点	
■的投げ ** : 5~6回命中。 * : 3~4回命中。 0 : 命中が2回以下。	<input style="width: 40px; height: 20px;" type="text"/>
<ボール調整力> 4点	
■ジグザグ走 ** : スティックや足からボールが離れることなくできる。 * : ボールをコントロールできる。 0 : 努力している。	<input style="width: 40px; height: 20px;" type="text"/>
■ボールを高く投げ上げてキャッチ ** : 3回ともキャッチできる。 * : 2回キャッチできる。 0 : 1回以下。	<input style="width: 40px; height: 20px;" type="text"/>
合計点	
<input style="width: 40px; height: 20px; border: 2px solid black;" type="text"/>	
合計点が、12~16点→金、8~11点→銀、すべての課題を見せられた→銅	

図5 『子ども体操ワッペンテスト』評価票 2級/5歳児学年

子ども体操ワッペンテストの評価票	**大変良い(2点)、* 良い(1点)、0ふつう(0点)
3級／6歳児学年	氏名 _____
<体操> 10点	
■床運動 **：両腕を伸ばして倒立と側転ができ、身体重心を支持面上にもってることができる。伸身ジャンプでは身体に良い緊張があり、補助なしで後転ができ、はさみ跳びでは脚は伸ばされ高く上げられている。 *：両腕を伸ばして倒立と側転ができ、補助ありで後転ができる。 0：すべての課題において努力している。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
■跳び箱 **：どちらのジャンプも身体重心が高く、補助なしででき両足で踏み切ることができる。下向き横跳び越しでは両腕が伸ばされており、台上前転ではスムーズに回転できる。 *：完全ではないが補助なしでできる。 0：努力している。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
■バランス運動 **：つま先でバランス運動ができ、身体に良い緊張がある。(一度だけ落下してもよい。) 側転では身体重心を支持面上にもってることができる。 *：すべての課題が安全になされている。 0：努力している。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
■ミニトランポリン **：スムーズにできる。助走から片足で踏み切ってトランポリンへ、そしてトランポリンの上で両足踏み切りし、しっかりと立って着地できる。抱え込みジャンプでは膝は高く引き上げられており、とび前転では脚が伸ばされクリアな動きができています。 *：完全ではないが、正しく踏み切れている。 0：努力している。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
■鉄棒 **：身体を伸ばして両腕支持ができ、前回りした後、抱え込みぶら下がりから足を床に触れることなく、すばやく脚をそろえて、身体を伸ばし下方に振り込んで着地できる。 *：すべての課題はクリアで見分けがつかないが、足が床に触れてしまう。 0：努力している。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
<ボール> 2点	
■的投げ **：5～6回命中。 *：3～4回命中。 0：命中が2回以下。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
<ボール調整力> 4点	
■ジグザグ走 **：安定したリズムミカルなドリブルである。 *：ボールをコントロールできる。 0：努力している。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
■壁に向かってワンバウンドパスしてキャッチ **：3回ともキャッチできる。 *：2回キャッチできる。 0：1回以下。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
合計点	
<input style="width: 40px; height: 30px; border: 2px solid black;" type="text"/>	
合計点が、12～16点→金、8～11点→銀、すべての課題を見せられた→銅	

図6 『子ども体操ワッペンテスト』評価票 3級／6歳児学年

子ども体操ワッペンテストの評価票	**大変良い(2点)、* 良い(1点)、0ふつう(0点)
4級/7歳児学年	氏名 _____
<体操> 10点	
■床運動 **:倒立では垂直な状態でしばらく静止でき、かつスムーズな回転ができる。跳び前転では、両足で踏み切った後、脚が伸ばされ、空中の局面がクリアである。はさみ跳びもクリアで、側転では身体重心を支持面上にもつてくことができ、体操的要素すべてにおいて、身体に良い緊張がある。 *:倒立からスムーズに前転でき、身体に良い緊張をもって跳び前転ができ、両腕を伸ばして側転ができる。体操的要素すべてをクリアにできる。 0:努力しており、すべての課題が見せられている。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
■跳び箱 **:抱え込み閉脚跳びでは足が跳び箱に触れることなく跳ぶことができ、側転では身体重心を支持面上にもつてくことができしっかりと着地できる。 *:抱え込み閉脚跳びでは足が跳び箱に触れてしまったが、側転からしっかりと着地できる。 0:跳び箱にしゃがんで跳びのるか、膝をついて跳びのること、または下向き横跳び越しができる。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
■バランス運動 **:つま先でバランス運動ができ、身体に良い緊張がある。(一度だけ落下してもよい。)手を使わずに座ったり立ったりでき、側転では身体重心を支持面上にもつてくことができ、かつしっかりと着地できる。 *:身体に良い緊張があり、すべての課題が安全になされている。 0:努力している。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
■ミニトランポリン **:宙返りでは、スムーズな助走、正しい踏み切り、空中でのクリアな回転ができる。抱え込みジャンプ1/2ターンでは、膝は高く引き上げられており、半回転の後、しっかりと着地できている。 *:すべての課題が安全になされている。 0:努力している。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
■鉄棒 **:鉄棒に腰をつけた状態で、かつ頭を反らせることなくスムーズに逆上がりでき、身体が伸ばされた正しい両腕支持の姿勢がとれ、クリアな空中姿勢を保ちながら下方への振り込みから安定した着地ができる。 *:鉄棒に足が触れてしまうがスムーズに回転でき、しっかりと着地できる。 0:努力している。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
<ボール> 2点	
■的投げ **:9~12点。 *:5~8点。 0:4点以下。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
<ボール調整力> 4点	
■ジグザグ走 **:ボールを失うことなく確実に運ぶことができる。 *:ボールをコントロールできる。 0:努力している。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
■ボールを高く投げ上げてキャッチ **:ターンした後キャッチできる。 *:座ってキャッチできる。 0:試した。	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
合計点	
合計点が、12~16点→金、8~11点→銀、すべての課題を見せられた→銅	

図7 『子ども体操ワッペンテスト』評価票 4級/7歳児学年

表9は、『子ども体操ワッペンテスト』の種目概要と点数配分である。4歳児学年においては、<体操>と<ボール>の点数は8点ずつで同等であるが、5歳児～7歳児学年では、<体操>と<ボール>の点数は10点と6点で、<体操>の比重が大きいことがわかる。

表9 『子ども体操ワッペンテスト』の種目概要と点数配分

	<体操>						<ボール>				
	床運動	跳び箱	バランス運動	ミニトランポリン	鉄棒	計	的投げ	ジグザグ走	その他		計
4歳児学年	2	2	2	2		8	2	2	2	2	8
5歳児学年	2	2	2	2	2	10	2	2	2		6
6歳児学年	2	2	2	2	2	10	2	2	2		6
7歳児学年	2	2	2	2	2	10	2	2	2		6

次に、各種目の技について、どの学年で実施されているかを表にまとめた。体操用語とみられるドイツ語については、どのような技なのか定かでなかったため、インターネットによりドイツ語で検索し、複数の動画や絵により、同一動作であることを確認した上で、最もわかりやすい図⁸⁾を引用し添付した（(18)以外の(1)～(23)、(18)は日本の文献¹¹⁾より引用）。

<体操>床運動

表10は、床運動の内容をまとめたものである。倒立系では、「壁登り倒立」（4歳児学年）、「蹴り上げ倒立」（5歳児学年～）、「倒立前転」（7歳児学年）の順で、また側転系では、「下向き横跳び越し」（5歳児学年）、「側転」（6歳児学年～）の順で段階的に実施されている。倒立系、側転系ともに、上肢に体重をかけ身体重心を支持面上に移動させる運動である。このことから、4歳児学年の「壁登り倒立」で上肢に体重をかけたり、逆さまになることに慣れさせた上で、徐々に身体重心を支持面上にもってくる課題へと段階的に導いていることがわかる。また評価票をみると、5歳児学年では、「蹴り上げ倒立」で脚を高く振り上げられること、「下向き横跳び越し」で両腕が伸ばされていることを良い動きの基準としており、この基準をクリアすることにより、6歳児学年で、より良いとされる「側転」すなわち身体重心を支持面上にもってこることが可能になるとの考えであることが推察できる。回転系（前額水平軸）では、「前転」（4歳児学年～）、「斜面での後転」（5歳児学年）、「後転」（6歳児学年）、「跳び前転」および「倒立前転」（7歳児学年）の順で段階的に実施されている。加え、「前転」、「斜面での後転」、「後転」では補助ありも想定されていることから、よりゆるやかな段階的指導が可能であることがわかる。ジャンプ系では「お馬ちゃん跳び」（4歳児学年～）、「伸身ジャンプ1/2ターン」（5歳児学年～）、「はさみ跳び」（6歳児学年～）、「大ジャンプ」（7歳児学年）の順で段階的に実施されている。ジャンプ系の中では、伸身ジャンプのみ股関節屈曲を伴わないので系統が異なるが、他のジャンプはすべて股関節屈曲を伴い、片足で踏み切り、もう一方の足で着地するジャンプで同系統と考えられる。評価票をみると4歳児学年の「お馬ちゃん跳び」で膝が高く引き上げられていることを良い動きの基準としており、この基準をクリアすることにより、「はさみ跳び」や「大ジャンプ」などよりダイナミックなジャンプが可能となるとの考えであることが推察できる。

表10 『子ども体操ワッペンテスト』の<体操>床運動の内容

	壁登り倒立※	蹴り上げ倒立		倒立前転	前転 (補助あり)	後転		跳び前転
			1段跳び箱上			斜面で (補助あり)	(子ども 補助あり)	
4歳児学年	○				○			
5歳児学年		○				○		
6歳児学年			○				○	
7歳児学年				○				○

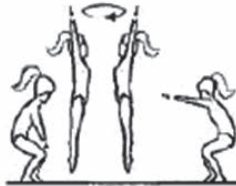
	お馬ちゃん 跳び (1)	伸身ジャンプ 1/2ターン (2)	はさみ跳び (3)	大ジャンプ (4)	下向き 横跳び越し (5) 1段跳び箱で	側転		水平 バランス (6)
						1段跳び箱上	助走つき	
4歳児学年	○							
5歳児学年	○	○			○			
6歳児学年		○	○			○		
7歳児学年			○	○			○	○

※ 両手を床につき、お腹を壁に向け、足で壁を登るように行う倒立のことである。
 (1)~(6) 下図を参照。

(1)お馬ちゃん跳び
(Pferdchensprung)



(2)伸身ジャンプ1/2ターン
(Strecksprung mit halber Drehung)



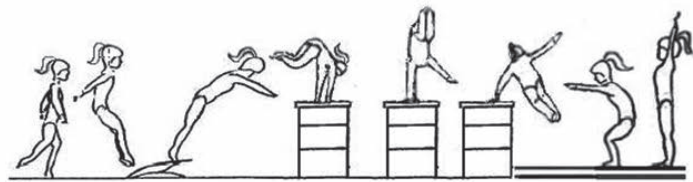
(3)はさみ跳び
(Schersprung)



(4)大ジャンプ
(Schrittsprung)



(5)下向き横跳び越し
(Hockwende)



(6)水平バランス
(Standwaage)



<体操>跳び箱

表11は、跳び箱の内容をまとめたものである。日本のように跳び箱を縦に置いた開脚跳びは行われていない。「膝をついて跳びのる」（4歳児学年）のが第一段階、ついで「しゃがんで跳びのる」（4

表11 『子ども体操ワッペンテスト』の<体操>跳び箱の内容

	膝で跳びのる (7)	しゃがんで跳びのる (8)		下向き 横跳び越し (9)	台上前転	抱え込み 閉脚跳び (10)
	小跳び箱	小跳び箱	踏切板＋ 3段跳び箱	踏切板＋ 3段跳び箱	踏切板＋ 3段跳び箱	踏切板＋ 3段跳び箱
4歳児学年	○	○				
5歳児学年		○	○			
6歳児学年				○	○	
7歳児学年			○			○

	伸身ジャンプ下り (11)		側転下り
	小跳び箱	3段跳び箱	3段跳び箱
4歳児学年	○		
5歳児学年	○	○	
6歳児学年			
7歳児学年			○

(7)～(11) 下図を参照。

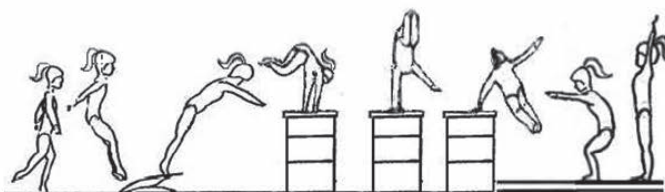
(7)膝で跳びのる
(Aufknien)



(8)しゃがんで跳びのる
(Aufhocken)



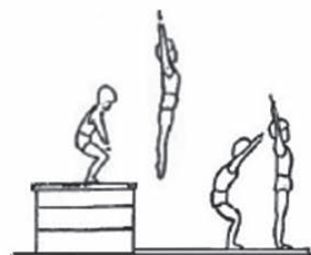
(9)下向き横跳び越し
(Hockwende)



(10)抱え込み閉脚跳び
(Hocksprung)



(11)伸身ジャンプ
(Strecksprung)



歳児学年～)、「下向き横跳び越し」および「台上前転」(6歳児学年)、「抱え込み閉脚跳び」(7歳児学年)の順で段階的に実施されている。加え「しゃがんで跳びのる」については、小跳び箱から3段跳び箱へとよりゆるやかな段階的指導がなされている。評価票より6歳児学年の「下向き横跳び越し」および「台上前転」では、補助ありも想定されていることがわかり、よりゆるやかな段階的指導がなされていることがわかる。加え、5歳児学年の3段跳び箱に「しゃがんで跳びのる」では、両手の間に膝を持ってくることを良い動きの基準としており、この基準をクリアすることにより、「抱え込み閉脚跳び」が可能になるとの考えであることが推察できる。また、6歳児学年の「下向き横跳び越し」および「台上前転」では、両足で踏み切ること、身体重心が高く引き上げられていることを良い動きの基準としており、この基準をクリアすることにより、「抱え込み閉脚跳び」など、より高度な技が可能になるとの考えであることが推察できる。跳び箱から下りる方法としては、「伸身ジャンプ下り」(4歳児学年～)、「側転下り」(7歳児学年)の順で段階的に実施されており、「伸身ジャンプ下り」については、小跳び箱から3段跳び箱へとよりゆるやかな段階的指導がなされている。「側転下り」については、バランス運動において6歳児学年でも扱われている。評価票をみると、4歳児学年の「伸身ジャンプ」ですでに身体に良い緊張があることを良い動きの基準としており、ジャンプのような動的な動きにおいても身体をまっすぐに保てるような静的筋力を重視していることがわかる。

<体操>バランス運動

表12は、バランス運動の内容をまとめたものである。バランス運動とは平均台に似た運動で、写真1にあるような長いベンチを使用する。このベンチは、上下どちらを上にしても使用することができ、一方は幅が狭く、もう一方は幅が広がっている。また、このベンチを小跳び箱の上に乗せることにより高い平均台として使用することもできる。写真2にあるように、跳び箱も日本の跳び箱とは違い上面が平らなのでこのような使用が可能である。バランス運動では、このようなベンチの機能を活かして、①幅が広く低いベンチ(4歳児学年)、②幅が狭く低いベンチ(5～6歳児学年)、③幅が狭く高いベンチ(7歳児学年)の順で実施されており、ベンチの幅や高さによる段階的指導が考えられていることがわかる。ターン系(垂直軸での)では、「1/2ターン」(4歳児学年～)、「1/1ターン」(6歳児学年～)の順で、ベンチから下りる方法としては、「伸身ジャンプ下り」(4歳児学年)、「横開脚ジャンプ下り」(5歳児学年)、「側転下り」(6歳児学年～)の順で段階的に実施されている。評価票

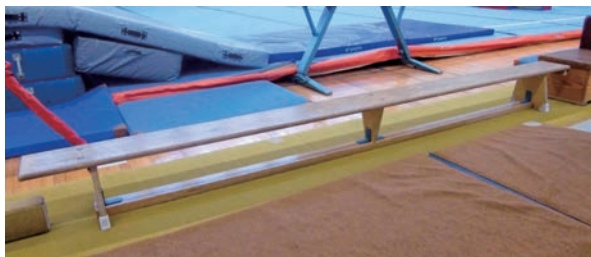


写真1 ベンチ 上下どちらを上にしても使用することができる



写真2 小跳び箱 上面が平らである

表12 『子ども体操ワッペンテスト』の<体操>バランス運動の内容

	前歩き			後ろ歩き			お馬ちゃん跳び (12)		
	①幅広い	②幅狭い	③幅狭い 高い	①幅広い	②幅狭い	③幅狭い 高い	①幅広い	②幅狭い	③幅狭い 高い
4歳児学年	○			○			○		
5歳児学年		○			○			○	
6歳児学年		○			○			○	
7歳児学年			○			○			○

	1/2ターン (13)		1/1ターン		しゃがむ・立つ			水平バランス (14)	
	①幅広い	②幅狭い	②幅狭い	③幅狭い 高い	①幅広い	②幅狭い	③幅狭い 高い	②幅狭い	③幅狭い 高い
4歳児学年	○				○				
5歳児学年		○				○		○	
6歳児学年			○			○		○	
7歳児学年				○			○		○

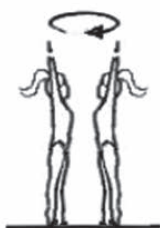
	伸身 ジャンプ 下り(15)	横開脚 ジャンプ 下り(16)	側転下り	
	①幅広い	②幅狭い	②幅狭い	③幅狭い 高い
4歳児学年	○			
5歳児学年		○		
6歳児学年			○	
7歳児学年				○

(12)～(16) 下図を参照。

(12)お馬ちゃん跳び
(Pferdchensprung)



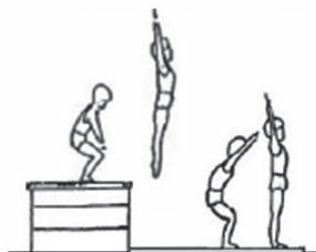
(13)1/2ターン
(halbe Drehung)



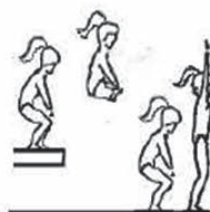
(14)水平バランス
(Standwaage)



(15)伸身ジャンプ
(Strecksprung)



(16)横開脚ジャンプ
(Grätschsprung)



をみると、4歳児学年でも、「バランス運動」全体を通して身体に良い緊張があることや、つま先でターンできること、「伸身ジャンプ」では腕を振って跳ぶことができることを良い動きの基準としており、幼いうちから身体を垂直に保てる静的筋力や上下肢の連動を重視していることがわかる。

<体操>トランポリン

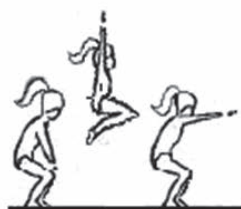
表13は、トランポリンの内容をまとめたものである。バランス運動で使用したベンチを2台横に並べて助走コースをつくり、その先に小さなトランポリンを置き、さらにその先にマットを置く。ベンチとトランポリンとマットはほぼ同じ高さである。「伸身ジャンプ」(4歳児学年)、「抱え込みジャンプ」および「横開脚ジャンプ」(5歳児学年～)、「跳び前転」(6歳児学年)、「宙返り」または「抱え込みジャンプ1/2ターン」(7歳児学年)の順で段階的に実施されている。「抱え込みジャンプ1/2ターン」とは、垂直軸で1/2ターンする抱え込みジャンプのことである。評価票をみると、4歳児学年でも、片足で踏み切ってトランポリンへ、そしてトランポリン上で両足踏み切りした後、両足でしっかりと着地できることを良い動きの基準としており、この基準をクリアすることにより、「抱え込みジャンプ」や「横開脚ジャンプ」、「宙返り」などより高度な技が可能になるとの考えであることが推察できる。また、4、5歳児学年における、やや未熟な動きとして、片足で踏み切れるがトランポリン上で何度かジャンプしてしまうことが挙げられている。ここでも、やはり幼いうちから巧緻性に関わる事が重視されていることがうかがえる。

表13 『子ども体操ワッペンテスト』の<体操>ミニトランポリンの内容

	伸身ジャンプ	抱え込みジャンプ (17)	横開脚ジャンプ	跳び前転	宙返りまたは 抱え込みジャンプ 1/2ターン
4歳児学年	○				
5歳児学年		○	○		
6歳児学年		○		○	
7歳児学年					○

(17) 下図を参照。

(17)抱え込みジャンプ
(Hocksprung)



<体操>鉄棒

表14は、鉄棒の内容をまとめたものである。鉄棒の種目は4歳児学年にはなく、5歳児学年から始まる。「足抜きまわり」とは、逆上がりの要領で両足を持ち上げ、鉄棒の下で後方回転して着地し、再びお尻を持ち上げ両腕の間から前方回転して元に戻る技で、日本でも基礎的な練習として行

われる¹²⁾。「足抜きまわり」（5歳児学年）、「ジャンプして両腕支持」および「前回り」（6歳児学年）、「逆上がり」および「後方支持回転」（7歳児学年）の順で段階的に実施されている。「後方支持回転」は、両腕支持の状態から後方に回転することで、日本でも上級の技として実施されている¹³⁾。「後方支持回転」については、補助ありも想定されており、よりゆるやかな段階的指導がなされている。下り技については、「抱え込みのぶらさがり～下方へ振り込みからの着地」（6歳児学年）、「後ろへの振り～下方へ振り込みからの着地」（7歳児学年）の順で段階的に実施されている。この下り技は、絵を見る限り、非常に高度な技に思われるが、実際、TSVの幼い子どもたちがどの程度の精度

表14 『子ども体操ワッペンテスト』の<体操>鉄棒の内容

	足抜きまわり (18)	ジャンプして 両腕支持 (19)	前回り (20)	逆上がり (21)	後方支持回転 (補助あり)	下方への振り込み からの着地(22)	
						抱え込みの ぶらさがり～	後ろへの 振り～(23)
4歳児学年	鉄棒はなし						
5歳児学年	○						
6歳児学年		○	○			○	
7歳児学年				○	○		○

(18)～(23) 下図を参照。

(18)足抜きまわり

(Überdrehen rückwärts gehockt – Rolle vorwärts)



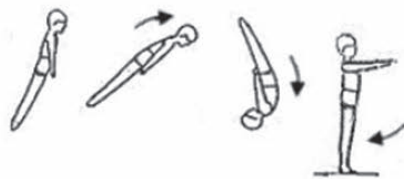
(19)ジャンプして両腕支持

(Sprung in den Stütz)



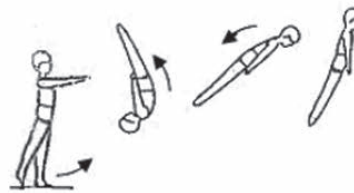
(20)前回り

(Vorlings)



(21)逆上がり

(Fellaufschwung vorlings ruckwärts)



(22)下方への振り込みからの着地

(Unterschwung)



(23)後ろへの振り

(Rückschwung)



で実施できるのかはわからない。この点については、次の調査で明らかにしたい。また、この下り技は子どもの技としては日本ではあまり実施されていないようであるが、インターネットによって「Unterschwung (下方への振り込み)」を検索すると、10歳代と思われる子どもによる精度の高い多くの動画を確認することができる。日本で一般的に行われる似た技に「グライダー」というものがあるが、これは、鉄棒をつかんだ両手の外側に足をひっかけて下方に振り込み身体を伸ばしながら前方に着地する技で、上級の技とされている¹⁴⁾。

<体操>多種目で重複して扱われている技

表15は、鉄棒以外の<体操>の技について、多種目で重複して行われているものをまとめたものである。扱われている回数でみると、「伸身ジャンプ」(7回)、「お馬ちゃん跳び」(5回)、「側転」(5回)、「水平バランス」(4回)が多く扱われており、重要な動きと考えられていることが推察できる。「伸身ジャンプ」と「お馬ちゃん跳び」は、低学年から実施され、「側転」と「水平バランス」は主に高学年で実施されている。

表15 『子ども体操ワッペンテスト』 <体操>多種目で重複して扱われている技

	跳び前転		お馬ちゃん跳び				下向き横跳び越し	
	床	トランポリン	床	バランス運動			床	跳び箱
				幅広い	幅狭い	幅狭い・高い		
4歳児学年			○	○				
5歳児学年			○				○	
6歳児学年		○			○			○
7歳児学年	○					○		

	水平バランス			伸身ジャンプ				
	床	バランス運動		床	下り		ジャンプ	
		幅狭い	幅狭い・高い		跳び箱	バランス運動		トランポリン
		幅狭い	幅狭い・高い		小跳び箱	3段跳び箱	幅広い	
4歳児学年					○		○	○
5歳児学年		○		○	○	○		
6歳児学年		○		○				
7歳児学年	○		○					

	側転					横開脚ジャンプ	
	側転		側転下り			下り	ジャンプ
	床		跳び箱	バランス運動		バランス運動	トランポリン
	跳び箱1段	助走つき	3段跳び箱	幅狭い	幅狭い・高い	幅狭い	
4歳児学年							
5歳児学年						○	○
6歳児学年	○			○			
7歳児学年		○	○		○		

<ボール>

表16は、<ボール>の内容をまとめたものである。的投げでは、的の大きさを小さくすることや的までの距離や高さを増やすことによる段階的指導が考えられていることがわかる。また、ジグザグ走では、「手で転がす」（4歳児学年）、「ホッケースティックを使って転がすまたは足で蹴って転がす」（5歳児学年）、「手でドリブルをする」（6歳児学年～）の順で段階的に実施されている。また、「狙った場所にボールをつく」および「狙った場所にボールを蹴る」（4歳児学年）、「ボールを高く上げて

表16 『子ども体操ワッペンテスト』 <ボール>

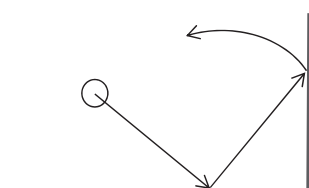
	的投げ			
	小跳び箱上のフープ 1m離れて	3段跳び箱上のフープ 2m離れて	4段跳び箱上のコーン 3m離れて	バスケットボール のゴール
4歳児学年	○			
5歳児学年		○		
6歳児学年			○	
7歳児学年				○

	ジグザグ走(コーンを4つ置いて)			
	手で転がして	ホッケースティックで または足で蹴って	手でドリブル	行き:手でドリブル 帰り:後ろ歩きの ドリブル
4歳児学年	○			
5歳児学年		○		
6歳児学年			○	
7歳児学年				○

	その他				
	床に置いた フープの中で ボールをバウンドして キャッチ	サッカーゴールに シュート 3～5m離れて	ボールを高く上げて		壁に向かって ワンバウンドパスして キャッチ(24) 最高2m離れて
			拍手してキャッチ	1回転ターンして または座ってキャッチ	
4歳児学年	○	○			
5歳児学年			○		
6歳児学年					○
7歳児学年				○	

(24) 下図を参照。

(24)壁に向かってワンバウンドパスし、壁に当たったボールをキャッチする
(Bodenpass gegen die Wand werfen und fangen)



キャッチする」(5歳児学年～)、「壁に向かってボールをワンバウンドパスし、はね返ったボールをキャッチする」(6歳児学年)の順で段階的に実施されている。〈ボール〉では、基礎的なボール操作能が重視されていることがわかる。

以上より、『子ども体操ワッペンテスト』における各種目の技は、4～7歳児の4年間で段階的に指導されていることがわかる。また、評価票より、4～5歳の幼児期に獲得すべき到達目標のいくつかも明らかになった。またそれらは、『子ども体操ワッペンテスト』の中で数多く扱われている技—「お馬ちゃん跳び」、「伸身ジャンプ」、「側転」、「水平バランス」に関係する内容であることも興味深い。すなわち、4歳児学年の良い動きの基準として、「お馬ちゃん跳び」で膝が高く引き上げられていることや「バランス運動」で身体に良い緊張があること、「ターン」がつま先でできることや、「伸身ジャンプ」で身体に良い緊張があり、腕を振って跳ぶことができること、「トランポリン」では片足で踏み切って、両足で跳び、両足でしっかりと着地できることが挙げられており、この学年ですでに、身体をまっすぐに保持できる静的筋力や、ジャンプと腕の振り、ジャンプと膝の引き上げを連動させるような巧緻性や、助走から片足で踏み切り両足で跳ぶ際に必要な巧緻性が到達目標とされていることがわかる。また、5歳児学年では、「下向き横跳び越し」で両腕が伸ばされていることや「蹴り上げ倒立」で脚を高く振り上げられることを良い動きの基準としている。これらは、「側転」における良い動きの基準—身体重心を支持面上にもってこるこの前段階と考えられる。以上のことから、『子ども体操ワッペンテスト』の〈体操〉の内容については、年齢に比して高度な印象はあるものの、4～5歳児学年で到達目標としていることは、必ずしも高度ではなく、より高難度の技を獲得するために必要な基礎的なことであることがわかる。また、『子ども体操ワッペンテスト』を実施することにより、どの段階の到達目標がクリアできていないのかを明らかにすることができ、指導者が指導指針を再検討する作用があることも確認できる。加え、『子ども体操ワッペンテスト』をみる限り、〈体操〉の方が〈ボール〉より種目数が多く、また内容的にも、〈ボール〉の方がより基礎的なことが重視されている。

(3) 指導場面の実際

前述したように、TSVでは、4歳児学年の終わりに、『スポーツテスト』を実施し、才能を促進すべき「促進グループ」とスポーツに消極的な「創造的グループ」を抽出し、5歳児学年より3年間、それぞれに相応しいやり方で運動指導を実践している。両グループの講座を見学し、その指導場面を記録し、指導の特性や能力別にクラス分けすることの有効性を考察する。

i. 指導場面

表17、18、19は、「創造的グループ」2講座、「促進グループ」1講座の指導場面についてまとめたものである。

指導場面①：創造的グループ

日時：2011年9月13日 14：00～15：00

参加者：5歳児学年 14名

指導教員：イリス・デューエ専任教諭

プログラムの概要は、表17の通りである。

表17 創造的グループ（5歳児学年）の指導内容①

時間	活動	活動内容と教師の援助
14:00	始まりの挨拶	新年度最初の活動であるため、子どもの名前を訊きながら会話する。
	鬼ごっこの活動	教師が一人の子どもにヘルメットを取ってきてと促し、そのヘルメットをかぶった子どもがオニという設定。オニにタッチされたらヘルメットを渡し、オニが交代する。バスケットコート1面程度のスペースなので、教師がコート中央に立ち、コート半面で鬼ごっこを展開するよう促す。
14:23	ローラーボード遊び①	教師はローラーボードを見せ「これはあなたたちのトラックです。好きなように運転してください。」と言い、子どもに1台ずつ渡す。子どもたちは正座や、腹ばいになって乗り、手でこいで進んだり、座って足でこいだりして遊ぶ。教師が、ローラーボードを押して、勢い良くボードの上に跳び乗るところを見せるが、チャレンジする子どもは見られない。
14:31	ローラーボード遊び②	教師は体育館のラインを指し「床の線は道路です。線の上をトラックで走ってみよう。」と提案し、活動が始まる。しばらくして「何色の線があるか？」と子どもに問いかけ、「青」は高速道路だから速く走ろう、「赤」は県道だからゆっくりと、「青」は30km以下の道路ね。」といった刺激を子どもに与える。床に引かれた線の色をイメージしながら、スピード変化のある活動が展開される。
14:39	ローラーボード遊び③	教師は赤と青のボールを持つてくる。赤のボールを持ち上げ「赤信号のときはどうするの？」と子どもに問う。その後、教師が赤いボールを持ち上げたら止まる、青いボールを持ち上げたら進むというルールが新たに加わる。
14:49	ローラーボード遊び④	教師の提案で、子どもは軽い素材のブロック、砂袋(大きめのお手玉のようなもの)をトラック(ローラーボード)で運び、一箇所に集める。運んだブロックで建物を作り、その脇に砂袋、トラックを一行に並べ建物に通じる道をつくる。一行に並んで、その道をみんなで歩きわたる。
		
14:55	終わりの活動	体育館中央に集まり、子ども全員で輪になり手をつないで腹ばいになる。教師は、茶目っ気を出しながら、子どもの足を引っ張っていく。教師は1人の子どもに、同じことをするように促す。1人、2人と立ち上がって、友達の足を引っ張る。最後に、教師を取り囲み挨拶をして終了する。

指導場面②：創造的グループ

日時：2012年8月28日 14：00～15：00

参加者：5歳児学年 15名

指導教員：イリス・デューエ専任教諭

プログラムの概要は表18の通りである。

表18 創造的グループ（5歳児学年）の指導内容②

時間	活動	活動内容と教師の援助
14:00	始まりの声がけ	新年度2回目の活動。名前を確認する。
	音楽リズム遊び	音楽リズムに合わせた体操を展開。音楽リズムの中に、身体動作(止まる、回るなど)や模倣動作(仔馬のようになど)の指示語が挿入されており、それに合わせて活動を展開。緩急のリズムは教師が指示する。
14:10	じゅうたん遊び①	<p>じゅうたん遊びのために、教材が配られる(写真1)。※じゅうたんは、 Teppichfliesen (Teppichfliesen) という教材で、柔らかい素材で、表裏で感触が異なり、滑りやすい面と滑りにくい面となっている。</p>  <p>写真1 じゅうたん (Teppich fliesen)</p>  <p>写真2 じゅうたんの配布</p> <p>教師は、子どもの動きを取り上げ、みんなに紹介する。例えば、「上に投げている子がいる。」「投げて、キャッチしている子がいる。」「旗のようになびかせて走っている子がいる。」「じゅうたんで滑っている子がいる。」「じゅうたんの上でお尻回している子がいる。」など。また、素材の特性に気づかせるため裸足になることを勧める。</p>  <p>写真3 投げ上げ</p>  <p>写真4 キャッチ</p>  <p>写真5 じゅうたん滑り</p>  <p>写真6 素材確認のため裸足に</p>  <p>写真7 五感で素材を確認</p>

<p>14:20</p>	<p>じゅうたん遊び②</p>	<p>滑らない面を確認し、ホール内にランダムにじゅうたンを敷き、椅子取りゲームのように音楽が止まったら、じゅうたんの上に素早くのる(写真8)。慣れてくると、「片足立ち」「あぐら座り」で素早くのる(写真9)。最後は、音楽のストップと同時に指示された色のじゅうたんに身体部位をつける(例:青に肘をつける、赤に鼻先をつけるなど)(写真10)。</p>
 <p>写真8 椅子取りゲーム</p>		 <p>写真9 片足立ちでストップ</p>  <p>写真10 色と身体部位をタッチ</p>
<p>14:25</p>	<p>じゅうたん遊び③</p>	<p>じゅうたンを丸めて望遠鏡を作り、2Fの保護者を見る(写真11)。望遠鏡をラップにしたり、メガホンにして大声を出す(写真12)。</p>
 <p>写真11 望遠鏡</p>		 <p>写真12 メガホン・ラップ</p>
<p>14:35</p>	<p>自由活動</p>	<p>隣の器械体操用具スペースに移動し、円になって座り、どんな器械があるのかを確認する(写真13)。その後、皆で挑戦すべき課題を考え、じゅうたんで印をつける(写真14)。合計4種類(ミニトランポリン(赤)、平均台(青)、吊り輪(黄)、跳び箱(緑)に印)。じゅうたんで印をつけた器械すべてに3回ずつ挑戦することを確認し、自由に活動を展開。できたら教師に報告に行く。教師は、再挑戦する課題を提案する(写真16)。</p>
 <p>写真13 器械の確認</p>		 <p>写真14 跳び箱活動</p>
 <p>写真15 吊り輪活動</p>		 <p>写真16 教師の提案</p>
<p>14:58</p>	<p>終わりの挨拶</p>	<p>じゅうたんを回収し、写真13の場所で終了。</p>

指導場面③：促進グループ

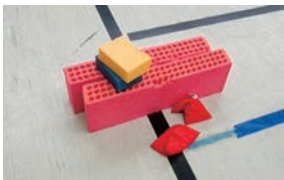
日時：2011年9月13日 15:00～16:00

参加者：6歳児学年12名

指導教員：イリス・デューエ専任教諭

プログラムの概要は表19の通りである。

表19 促進グループ（6歳児学年）の指導内容

時間	活動	活動内容と教師の援助
15:00	始まりの挨拶	新年度最初の活動であるが、持ち上がりがクラスであるため、子ども同士慣れた様子。挨拶の後、ローラーボードが手渡される。
	ローラーボード遊び	子どもは、思い思いにローラーボードで遊ぶ。雑巾掛けのように押しながら助走をつけ、勢い良く胸からボードに跳び乗る子どもが多い。しばらくして、教師は黄色いスポンジを示し、「チーズは臭いから遠くに投げよう！」と提案する。投げられたスポンジの近くにいた子どもは、それを取って、遠くに投げる活動が展開される。
	ローラーボード競争	3つのグループに別れ、バスケットボールコート半面くらいを使い、スタートラインの約20m前方に大きなブロック、スポンジ、砂袋が置かれる。それをグループ別に何れかひとつローラーボードに乗って持ち帰り、次の子どもが出発する。どのグループが早いか、リレー形式で展開される。 
	ローラーボード：立ち乗り	ローラーボードを雑巾がけのように押しながら走って勢いをつけ、ボードの上に立って乗る姿を教師が見せる。かなり難しい動作であり、かつ恐怖感もあるため、なかなかできる子どもはいない。しかし、どの子どもも果敢に挑戦する姿が観察される。
	ローラーボード：連結	2人1組でローラーボードに腹ばいになって縦に並ぶ。教師は「後ろの子は、前のこの足をしっかりつかもう！ 前の子どもは、しっかりとこごう！」という指示をだす。2人の子どもが一体となり、前方左右に進み、自由に前後の役割を交代する。
	ローラーボード：Stop & Go	再び一人の活動となり、音楽がかかっている時はローラーボードで進む、音楽が止まればローラーボードを停止させる活動が展開される。音楽が止まった時、すぐ静止できなかった子どもは罰ゲームとして次に音楽が止まるまで、その場で繰り返し倒転を行う。倒転の精度は非常に高く、罰ゲームであるにもかかわらず、楽しんで倒転を行う子どもの姿が観察される。
	倒転	ローラーボードを裏返しにして、それを越えるように倒転を行う。
	倒立	ローラーボードを裏返しにし、ボード上に両手をついて倒立を行う。難度の高い動きであるため、できている子どもはほとんどいない。ボード裏側には車輪がついているので、安全性を考慮すると、日本では見られない光景である。
	走る→ジャンプ→止まる	裏返しにされたローラーボードを点在させ、走ってボードを次々と跳び越える。音楽が止まると、ボードの上に立って止まる。ジャンプ方法について、最初は、片足で踏み切り、片足で着地する方法が、次に両足踏み切り、両足着地の方法が指示される。
	よく聴いて動く	ローラーボードに腹ばいで乗り、ボードの隅についている穴から下だけを見ることが指示される。子どもが穴を見ながら進んでいるとき、教師が軽い素材でできているブロックを打ち鳴らす。音のなった方向へ、子どもは視覚に頼らず聴覚を頼りに進む。次に、2人1組になり子ども同士で同様の活動を展開する。
15:58	終わりの活動	最後に、教師を取り囲み挨拶をして終了する。

ii. 指導場面の特性

「創造的グループ」の指導場面には、大きく3つの特性が見られる。

空想をともなった身体活動

前述したように、「創造的グループ」では、空想をともなった身体活動が主体となるが、実際、「創造的グループ」の指導場面①では、終始「工事現場」をテーマにした活動が展開される。ヘルメットを目印にした鬼ごっこに始まり、ローラーボードをトラックに見立ててブロックを運び、最後は皆で協力して、1つの建造物をつくり上げるという活動である。また、指導場面②でも、じゅうたん（柔らかい素材でできた四角いじゅうたんで Teppichfliesen）というを旗に見立ててなびかせたり、丸めて望遠鏡やラップに見立てるなど、空想をともなった遊びを展開している。ちなみに、「促進グループ」の指導場面③においても、黄色のスポンジをチーズに見立てる場面が見られる。

子どもたち主体の活動

「創造的グループ」では、子どもたちにアイデアを出させて、それを紹介し皆で共有する場面が見られる。例えば、指導場面①では、ローラーボードを渡し、「好きなように運転してみよう。」と指示し、子どもたちに自由にやらせて、「正座して手でこいでいる子がいる。」「腹ばいになって手でこいでいる子がいる。」「座って足でこいでいる子がいる。」と子どもたちの遊び方を紹介し、多様な遊び方を皆で共有している。また、指導場面②のじゅうたん遊びにおいても、やはり、まずはじゅうたんで自由に遊ばせて、「投げてキャッチしている子がいる。」「旗のようになびかせて走っている子がいる。」「じゅうたんで滑っている子がいる。」「じゅうたんの上でお尻回りにしている子がいる。」など子どもたちの遊びを紹介し、皆で遊び方を共有している。また、器械体操用具スペースでの活動では、その時間に使う機器（跳び箱、吊り輪など）を子どもたちに選択させている。このように、教師が遊び方を決めるのではなく、子どもたちが主体となって遊びのイメージを拡大するよう導いていると考えられる。

発問する、役割を与える

「創造的グループ」では、教師が子どもたちに対して発問する場面が多く見られる。指導場面①では、「床の線には何色がある?」「高速道路は何色?」「信号が赤のときはどうするの?」などの発問がなされ、それに対し子どもたちは積極的に答えている。また、指導場面②でも、教師がじゅうたんを丸めて見せ「何になる?」と発問し、子どもの発想を引きだしている。また、子どもに役割を与える場面も多く見られる。指導場面①では、最初の活動で1人の子どもにヘルメットを取りに行かせたり、最後の活動で、教師がまず腹ばいになった子どもたちの足を引っ張り、次に1人の子どもを選んで、その子どもに同じ役をやらせている。また、指導場面②では、使う機器（跳び箱、吊り輪など）を子どもたちとともに選定する際、意見を出した子どもに目印としてじゅうたんを置きに行かせている。また、じゅうたんで印をつけた機器に3回ずつチャレンジしたら教師に報告に来よう指示している。このように、発問に対して答えたり、役割を与えられたり、課題が達成できたら教師に報告することにより、子どもは承認されたと感じ、満足感を得ると考えられる。

また、「創造的グループ」、「促進グループ」に共通して、大きく2つの特性が見られる。

教材を多様な方法で使用する

「創造的グループ」、「促進グループ」とともに、教材を多様な方法で使用する場面が多く見られる。指導場面①及び③では、ローラーボードが使われているが、ローラーボードへの乗り方も、お尻で座って乗ったり、正座して乗ったり、腹ばいで乗ったり、立って乗ったり、雑巾がけのように勢いをつけて跳び乗ったりと様々である。また乗って走らせる他にも、物を載せて運んだり、ボードの端に開いた小さな穴から下を覗いたり、裏返して道に見立てたり、裏返した上に立ったり、裏返した上に両手をつけて倒立をしたり、裏返したローラーボードを越えて側転したり、ジャンプして跳び越えたりと、実にユニークである。指導場面②では、じゅうたんが使われているが、このじゅうたんについても、投げてキャッチしたり、旗のようになびかせたり、表裏で感触が異なり、滑りやすい面と滑りにくい面となっていることを利用して、滑りやすい面を下にして片足をのせて滑らせたり、お尻で乗ってくるくる回ったり、また滑らない面を下にして置き、音楽の停止とともに、すばやくじゅうたんの上に立つという椅子取りゲーム的な遊びをしたりと、実に多様な遊びを展開している。椅子取りゲームも、じゅうたんの上に“立つ”という遊びから、“片足で立つ”や“あぐらで座る”に変化させたり、じゅうたんの色の違いを利用して、「赤！鼻先！」という指示にしたがって、“指示された色のじゅうたんに身体部位をつける”という遊びに変化させている。すなわち、思考を刺激するような活動や、また1つのじゅうたんに複数の子どもが集まることにより仲間と関わりをもたせるような活動へと変化させている。このように教材の使用方法に多様性があり、かつその使用方法を次々と変化させることにより、子どもの集中力が途切れることなく活動が展開されている。

五感を活用した遊び

「創造的グループ」、「促進グループ」とともに、視覚や聴覚、触覚を活用した遊びが多く見られる。指導場面①では、床に描かれた線の色にしたがって、動きのスピードを変化させる遊びや、信号に見立てたボールの色によって進んだり、止まったりする遊び、また指導場面②では、“指示された色のじゅうたんに身体部位をつける”という遊びなど、色を見て判断する遊びが数多く見られる。また、指導場面②と③では、音楽が止まったら、じゅうたんやローラーボードの上に乗るという椅子取りゲーム的な遊びが見られる。これらは聴いて判断する遊びである。また、じゅうたんでの椅子取りゲームの前には、じゅうたんの表と裏の滑りやすさを裸足になって確認させ、「滑りにくい面を下にして活動するのはなぜか？」が問われ、起こりうる危険を考えさせている。加え、指導場面③では、ローラーボードに腹ばいで乗り、視覚に頼らず、先生が鳴らす小さな音だけを頼りに進むという活動が見られる。「促進グループ」においてはスピーディでダイナミックな活動が多い中、この活動は、静かな集中力が求められる対照的な活動である。スピーディでダイナミックな活動ばかりを連続するのでなく、このような対照的な活動を挿入することも、子どもの集中力を途切れさせない企ての1つと考えられる。

iii. 能力別クラスの有効性

「創造的グループ」の子どもは、教師が運動についてチャレンジするよう仕向けてもなかなかのってこないなど、運動技能について消極的であることが観察される。よって、教師は、床に描かれた線を道路に見立てて、線の色によってスピードを変化させるような課題や、信号に見立てた

ボールの色を見て、進んだり止まったりするなど、空想をともないつつ楽しく動きを変化させる課題を設定している。また、ローラーボードで、ブロックを運ぶ活動においても、スピードを競うのではなく、協力してブロックを運び、1つのものをつくることを目的としている。運動技能や運動量を求めなくても、達成感が得られるように計画されていることがわかる。また、子どもたちに発問して答えさせたり、役割を与えたり、課題が達成できたら教師に報告するなど、パフォーマンス以外にも承認される場が数多く準備されている。これらのことが、たとえスポーツに消極的であっても、子どもたちが喜んでこの講座に参加する理由であると推察できる。

一方、「促進グループ」では、ローラーボードに勢いをつけて立って乗ったり、裏返しにしたローラーボードに手をつけて倒立をするような難しい運動技能にも、果敢にチャレンジする姿が観察される。また、ローラーボードに自由に乗って遊ぶときのスピードは非常に速く、競争にも生き生きと取り組む姿が見られる。加え、側転の精度は驚くほど高く、罰ゲームで側転をする様子も、1人で側転できることを楽しんでいるようにさえ見える。これらのことから、「促進グループ」の子どもたちにとっては、有り余るパワーを十分発揮でき、かつ上達する欲求が満たされてこそ楽しい活動になり得るのだと推察できる。

以上より、TSVの子どもスポーツ部門では、「創造的グループ」においても、「促進グループ」においても、それぞれに相応しい“楽しさ”が重視されていることがわかる。教師は幼児期の発達特性を考慮し、“遊び”の中で運動したり、五感を働かせたり、思考する状況をつくっていることが確認できる。すなわち、TSVの講座は、日本の部活動やクラブチームに見られる“運動学習”ではなく“遊び”を実践する場なのである。このことは、TSVにおいて、一旦専門スポーツ講座に参加した子どもが「楽しくない」という理由で、基礎スポーツに戻ってくるというケースからもうかがえる。我々は当初、5歳児学年からの能力別クラスに、少なからず違和感を持ったが、実際に指導場面を観察すると、スポーツに対して消極的な子どもと積極的な子どもを同じクラスで楽しく活動させるのは難しく、むしろそれぞれに相応しいやり方で指導する方が有効であることも理解できた。大人になれば、余暇の楽しみとしてスポーツをする人もいれば、競技スポーツとして楽しむ人もいるのだから、当然のことかもしれない。しかし、能力別クラスが将来にわたって運動を継続するのに有効かどうかを検証するには、さらなる調査が必要であろう。また、このような体制で運動指導ができるのも、1学年200名という会員数の多さにある。したがって、TSVのやり方をそのまま日本の子どもの運動指導に援用することは難しいかもしれない。

4. まとめ

本研究より、TSVの子どもスポーツ部門—特に4歳児～7歳児学年の運動指導について、以下のことが明らかになった。これらのことは、日本の幼児～小学校低学年の子どもの運動指導において、試みる価値のある内容である。今後は日本において、これらの子どもを対象に運動指導を実践しながら、その有効性をさらに検証していきたい。

(1) 方針及び指導構造

- ・ 4～7歳児学年では、学年ごと1クラス20名のクラス編成で、陸上、ボール運動、器械体操を中心とした基礎スポーツと呼ばれる一講座多種目型の講座が指導される。
- ・ 4歳児学年で『スポーツテスト』が実施され、才能を促進すべき「促進グループ」とスポーツに消極的な「創造的グループ」が抽出され、5歳児学年より3年間、それぞれに相応しいやり方で指導される。

(2) 指導計画及び到達目標

- ・ 『スポーツテスト』の実施時期は、日本でいうと年中児（4歳児学年）の8～9月にあたる。
- ・ 『スポーツテスト』では、巧緻性、動的筋力、柔軟性、静的筋力の4要素が均等な比重で測定される。
- ・ 『子ども体操ワッペンテスト』における各種目の技は、4～7歳児の4年間で段階的に指導される。
- ・ 身体をまっすぐに保持するための静的筋力、身体部位の連動に関する巧緻性、助走から片足で踏み切り両足で跳ぶという一連の動作に必要な巧緻性は、最年少（4歳児学年）の『子ども体操ワッペンテスト』ですでに到達目標とされている。
- ・ 『子ども体操ワッペンテスト』には、指導者の指導指針を明確化する作用がある。

(3) 指導場面の実際

- ・ 「創造的グループ」においても、「促進グループ」においても、それぞれに相応しい“楽しさ”が重視されており、“学び”ではなく“遊び”として取り組む子どもたちの姿が観察される。
- ・ 「創造的グループ」に相応しい“楽しさ”とは、空想をともないながら動きを変化させることであり、「促進グループ」に相応しい“楽しさ”とはスピードを競ったり、運動技能を高めることであると観察される。

謝辞

本研究を進めるにあたり、我々の訪問を快く迎え、惜しみない協力をしてくださったバイヤー社体操—スポーツクラブの皆様、また通訳者として、多大なご協力をいただきました庵原眞理子氏とクルザワエリカ氏に感謝申し上げます。なお、本研究は本学ライフデザイン学部のプロジェクト研究助成を受けて遂行することができました。記して謝意を表します。

文献

- 1) 佐伯年詩雄：現代企業スポーツ論～ヨーロッパ企業のスポーツ支援調査に基づく経営戦略資源としての活用～，不昧堂出版，2004：p.98
- 2) 川西正志，野川春夫 監訳：ヨーロッパ諸国のスポーツクラブ～異文化比較のためのスポーツ社会学～，市村出版，2010：p.111
- 3) クリストフ・ブロイアー 編著，黒須 充 監訳：ドイツに学ぶスポーツクラブの発展と社会公益性，創文企画，2010：p.54
- 4) 山口泰雄：地域を変えた総合型地域スポーツクラブ，2006：p.20

- 5) ひょうご広域スポーツセンター総合型地域スポーツクラブ：http://www.sc21hyogo.jp/modules/pico/index.php?content_id=2 [2014.1.13]
- 6) 神戸市 総合型地域スポーツクラブ：<http://www.sportsclub-kobe.com/> [2014.1.13]
- 7) 佐伯年詩雄：現代企業スポーツ論～ヨーロッパ企業のスポーツ支援調査に基づく経営戦略資源としての活用～，不昧堂出版，2004：pp.87-133
- 8) 川西正志，野川春夫 監訳：ヨーロッパ諸国のスポーツクラブ～異文化比較のためのスポーツ社会学～，市村出版，2010：pp.103-120
- 9) クリストフ・プロイアー 編著，黒須 充 監訳：ドイツに学ぶスポーツクラブの発展と社会公益性，創文企画，2010
- 10) TSV（バイヤー社体操－スポーツクラブ）：<http://www.tsvbayer04.de> [2011.9.4]
- 11) 体操学校「Trun 10」：<http://www.turn10.at/schule/> [2012.3.26]
- 12) 行本浩人，赤羽綾子 監修：できたよ、鉄棒・平均台，ベースボールマガジン社，2012：pp.24-25
- 13) 行本浩人，赤羽綾子 監修：できたよ、鉄棒・平均台，ベースボールマガジン社，2012：pp.52-53
- 14) 行本浩人，赤羽綾子 監修：できたよ、鉄棒・平均台，ベースボールマガジン社，2012：pp.60-61

A Study on the Children's Sports Department
of the TSV Bayer 04 Leverkusen

SUZUKI Tomoko, SHIMAZAKI Hirotsugu, MATSUO Junichi

Abstract

The objective of the present study was to elucidate the principles, structure, and contents of instruction in the children's sports department of the TSV Bayer 04 Leverkusen sports club. We visited the relevant facilities located in Leverkusen, Germany on September 11-15, 2011, and August 28-31, 2012, and conducted interviews with full-time teachers, collected data, and observed classes. As a result, the following instruction system was clarified: ① a course entitled "Parent and child gymnastics" is provided for children between 0 and 3 years of age; ② a course entitled "Basic sports", which is centered around track and field, ball exercises, and gymnastics, is provided separately for each grade from ages 4 to 7 and for two grades combining ages 8 to 9; ③ at the end of the school year at age 4, a "sports test" is conducted to classify students by ability into the top 10%, who are enrolled into a class for harnessing their talent, the bottom 10%, who are enrolled into a class for enjoying sports, and an intermediate group, with these class groupings being kept intact for the subsequent three school years; ④ a "Children's gymnastics competition" is held annually during the four grades from ages 4 to 7; and ⑤ students enroll in specific sports courses from age 8-9 or later. In addition, the instruction contents and attainment targets in each grade were elucidated from the contents and evaluation criteria of the "Children's gymnastics competition". Moreover, the courses were conducted using various methods, and it became apparent that the children participated in them as "play" rather than "learning".

Keywords: Bayer AG, community-based general sports clubs, children's sports, exercise instruction